made by Japanese

上海レポート

ちょっとちがうぜ中国で農業

土下信人（つちした・のぶひと）

1949年愛知県生まれ。95年、沖縄で㈲土下を設立。組織培養技術を活用した苗生産・販売を中心とした農業のコンサルタント業務を開始。上海で組織培養施設への指導を行ない、2003年同地で組織培養会社、上海百奥微繁植物有限公司を設立。HP『大きな国で』を開設。
http://blog.livedoor.jp/touxia/

第72回　中国の外交戦略とアジアの農業

中国の巧みな外交術

2011年の中国の第一歩は、胡錦濤主席の訪米で始まった。この時主席は、200機の航空機をはじめとした総額3兆7000億円にものぼる注文を手土産に用意するという、実に巧みな外交術を見せた。オバマ大統領が進めている、輸出を拡大し、貿易赤字を減らすという政策に呼応するこの対応によって、米国民23万人の雇用が確保できると絶賛され、TPP参加を表明していない中国に対する論議をかわすことに成功した。時折見せる中国の外交能力の高さには、つくづく感心させられる。

こんな中国の外交手腕は、アジア諸国との間でも発揮されている。

例えば、04年以降、中国の輸出伸び率は減少傾向で、特に09年には大きく落ち込んだのだが、翌10年には見事に回復させている。

ここで大きな要因となったのは、ASEAN（東南アジア諸国連合）と締結したACFTA（ASEAN中国自由貿易協定）だ。ACFTAは、中国やタイ、ベトナムなど東南アジア諸国間での関税を、10年1月1日から一部撤廃する協定で、巨大な自由貿易圏の誕生となる。これによって中国の輸出増加を実現したわけだ。

アジアに浸透する外交戦略

中国の外交戦略は、GMS（大メコン経済圏）にも大きな影響を与えている。GMSとは、ベトナム、ラオス、カンボジア、ミャンマーに、タイと中国（雲南省）の2カ国を加えたメコン河流域の6カ国、約5億人で構成される経済圏のことだ。

現在、GMSで重視されているのは物流ルートの確立で、すでに中国（昆明）からラオスのビエンチャンを経由してバンコクに延びる道路は開通している。この道路に沿って走る高速鉄道と、昆明からラオスのフェイサイを経由してバンコクまで伸びる2000kmの高速道路の建設も急ピッチで進められている。

以前、このルートをタイのチェンマイから中国の西双版納（シーサンパンナ）まで辿ってみたが、タイでまず目についたのは、快適な道路環境と、12月だというのに田植えをしている光景だった。ACFTAの影響でタイから中国にコメが入り、それが人気を呼んでタイ国内での米価が前年の1・5倍に跳ね上がっているという状況の中で、農民の意欲が掻き立てられているように見えた。

タイには平地が多く、水田面積は日本の約7倍、1000万haにもおよぶ。しかも、2〜3期作だ。農家の平均農地面積も2haあり、相当な生産力を持っている。そんなタイでは、08年に日系農機メーカーのトラクタが2万5000台も売れるなど機械化も進んでおり、中国との関係がタイの農業を変えつつある。

タイのチェンコーンから国境を越えてラオスのファイサイに入ると、一見してラオスがほかの地域より遅れていることが分かる。しかし、中国の国境近くには、バナナを栽培している圃場やゴムの植林が目立ち、少しずつ中国系の農業関連企業が進出していることが見て取れた。

さらに進んで中国に入ると、西双版納まで架橋された直線的な高速道路が延びる。道路の両側には広大な野菜畑やゴム園が広がり、中国の農業の質が、タイやラオスとは大きく異なることを感じさせた。

この高速道路は、中国のODA5000万ドルでメコン河に橋が架かり、2012年に完成する予定だ。昆明〜バンコク間が車で30時間で行き来できるようになれば、GMSはさらに大きく成長するに違いない。

こうして中国の外交戦略は、関税の壁をなくすことでアジアに浸透し、各国の農業にチャンスを生んでいる。とかく米国に目が向きがちな日本は、この状況に対してどのような手を打つのだろうか。